要旨

筆者は小説『ハリー・ポッター』の魅力は、被差別の主体を架空の存在を置き換えて、社会的マイノリティの排除と包摂を表現していることだと考えた。読者は、当事者ではないからこそ、差別や偏見といった現象について分かりやすく考えることができると考えた。

主体を架空の存在に置き換える、『ハリー・ポッター』の小説上の手法を、別のメディアに応用して作品を制作したいと考えた。

制作の初めに、『ハリー・ポッター』における被差別の主体を架空の存在に置き換える描写について分析することにした。分析の対象は、作中社会における社会的マイノリティである、マグルと人狼にした。その結果、マグル（非魔法使い、非魔法使いの家系出身の魔法使い）は、人種差別や階級闘争の表象であり、伝統的な家系出身の魔法使いから、誹謗中傷やテロなどの差別行為の対象になっていることが分かった。また、人狼は、病気や障害のメタファーで、社会的障壁によって不利益を描写されていた。このように『ハリー・ポッター』では、現実社会における社会的マイノリティの不利益とリンクした、リアルな社会的マイノリティの排除を描いている。

次に、『ハリー・ポッター』の表現手法の分析を踏まえた上で、その手法をどのメディアに応用するかを検討した。その結果、『ハリー・ポッター』におけるグラフィックデザインの効果と、ポスターの社会性を反映するメディアとしての特性を踏まえて、制作のメインをポスターにすることにした。しかし、ポスターのみの展示では、社会的マイノリティを表現するのには限界があるため、複数のポスター、キャプション、補足資料から構成されるポスター展を制作することで、表現の制限の問題を解消することにした。

さらに、ポスター展の形式で社会的マイノリティを表現するにあたり、社会的マイノリティとメディについての分析を行った。社会的マイノリティへの差別的表現には、ヘイトスピーチやステレオタイプなどがあり、これらは社会的に弱い立場にある人を攻撃するだけでなく、人々に差別意識を植え付けるという問題点がある。

これまでの分析を踏まえ、架空の社会的マイノリティとして人狼を選び、架空の未来の日本における排除や包摂を、ポスターを通じて描写することで、現実社会の日本の社会的マイノリティに関する問題提起を行うことにした。　作品のメインであるポ

スターは、現実の社会的マイノリティの排除と包摂に関する事例を参照して制作した。さらに、そのポスターを架空の制作年順に沿って展示し、ポスター解説のキャプションや、架空の新聞の切り抜きを加えて、ポスター展の形式にした。

本制作は「鑑賞者が現代社会の社会的マイノリティに関する問題について考えられる作品」になることと、「制作の題材として、多くの人が存在を認知している一方で、実際には存在しないため、現代人に直接的な利害関係の無いファンタジーの架空的な存在を用いることで、現代社会を表現する手法の可能性を検討」することを目指した。